

ゴッペ返した(馬櫓)

佐呂間も開拓が進むにつれて、内地方面からの住来が頻繁になって来るようになる、様々な話題が生れて来た。こんな話も、もう誰も知っている話と思うが、書いて見ませう。

「やあよく遠い内地から来てくれました。丁度私用ががち合つて、そちらの方に出向いて迎へにも行かなくて失礼しました。駅から可成りありますが歩いて来ましたか」。

「いや、ゴッペに乗って来ました。〇〇さんに頼まれた荷物もありましたしね」。

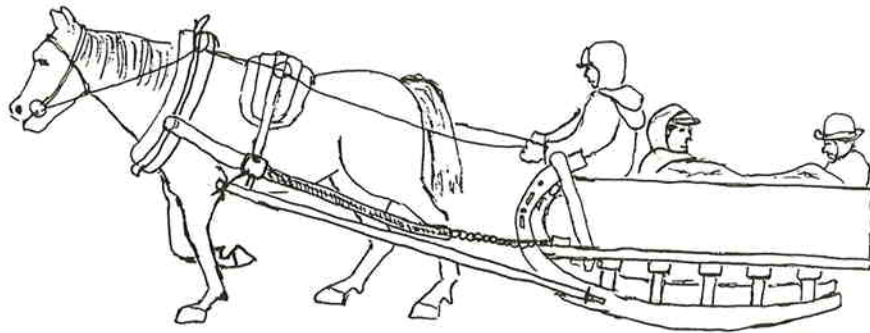
「えっ、ゴッペに？　と言うと……」

「ええ、ゴッペですよ、馬が挽つばつて客を乗せるあの大きい櫓の様なゴッペというものですよ。佐呂間の駅に降りたら、何台もありました。その一台に三人知らない人と相乗りで来ました。だが途中で、馬追いさんが、御者綱でびしゃつと振つて、馬の尻を叩いたら急に馬が走り出したら、道路の片向いてたところだったものだから、あつと言う間にひっくり返つたんだよ、おかげでひどい目に合いました。馬追いさんは、

「ゴッペ返へした。ゴッペ返へした。すみません」と謝つてたよ」

「ああ、判りました。全く内地の人は、北海道に来たばかりで、定期馬櫓に乗つて、やれやれ、目的地がもう直ぐそこだと言うとき

に、急に定期馬櫓がひっくり返る、そのしよつくのあつたときに、ゴッペ返へした。ゴッペ返した等言われたら、馬櫓のことの北海道の独特の方言と思うだろうよね。」

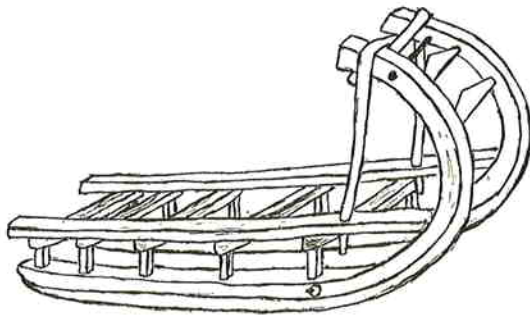


定期馬櫓の姿

定期馬櫓について

定期馬櫓とは、現在の様に自動車の時代になつてからの、タクシーと考えたらよいと思うが、佐呂間では、昭和三〇年頃に姿を消してしまつた。それは、ブルトーザーの性能がよくなつて、昭和二八年から、幹線道路の除雪をするようになったから。北見バスが夏冬同じように運行するようになったため、定期馬櫓の利用する者が自然になつた。

開拓当時、熊が至る処に出没した頃、定期馬櫓は、小さなラッパを吹きながら、「プープー」とラッパの音で熊が寄つて来ないというので、ラッパを利用していた。



馬櫓だけの絵

旧桜橋のところに出た幽霊

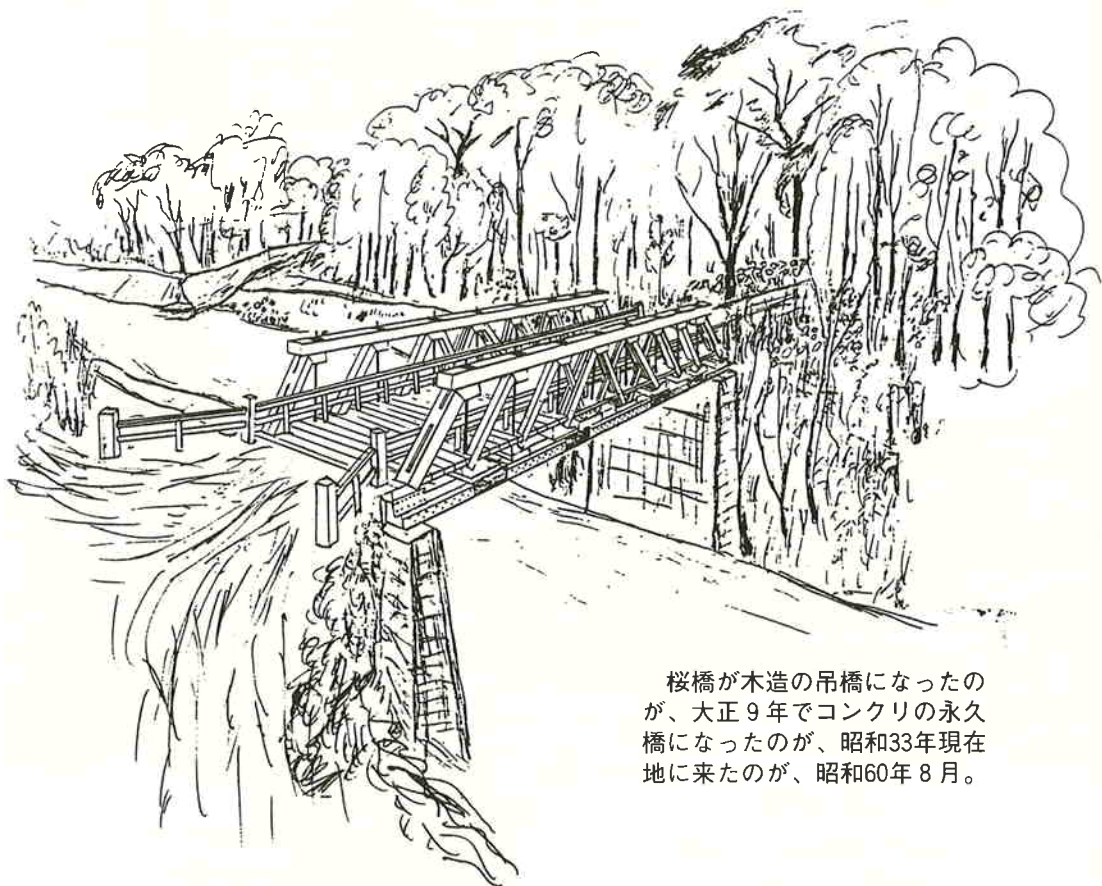
昭和一桁時代の旧桜橋付近は、うっ蒼とした森の中と表現した方がよい程、木が繁っていた。若佐の方から歩いて来ると、先づ防風林の林を通り越し、大昭寺付近まで。大川添いの森が、大昭寺下手に流れる朝日の銅山の沢からの支流添いの森、旧桜橋回り森のところ。富丘・西富を境界とする山が出張って橋を越えたら、出張った山の森と、大川辺の森が、ずっと。墓地の道路入口を越えるまで森林続き、立木の薄い所は、熊笹が繁っていて、道路も現在もそうだが直線のところが残らないのだ。そこに、大道路から少し離れてはいても墓があるのだから、全く幽霊の出るための、舞台装置は完備されていた。

昭和七年私が小学校三年生のときのこと、知り合いの若い当時二〇歳前の青年、用があって夕食後うちに来て、話しに花を咲せたとさの話です。

本論に入ります

『昨日の晩、用があつて中佐呂間の市街まで行ったのだが。ちようちんも持たずに行つたが曇つていて暗い晩だった。丁度お寺のところ曲りを越えて、もう少しで桜橋というとき、橋の手前の方に、白いものがふらふらとこちらに来る。足が見えないんだ。おや？っ頭の毛が立つようになつて、体中が固くなつた。スタスタ足音がして目の前に来たが、

桜橋木造吊橋



桜橋が木造の吊橋になったのが、大正9年でコンクリの永久橋になったのが、昭和33年現在地に来たのが、昭和60年8月。

足が見えないんだ。よく見たら頭の方が白く顔がないんだよ。物を言えず立ちすくんでいたら、女の声で、

『お晩でした今からどちらへ』

あつ下武士の○○さんの小母さんではないか、ほっとして胸を下し、

『小母さんだったのかね、今ごろ何処へ行っていたの』

『藤之台の△△さんところに用があつて行つていて、おしゃべりしていたらこんな時間になつてしまった。一月に入ると日が暮れるの早くてね』。

全くびつくりしたが、幽霊のように見えたのが無理ないんだ。あの暗がりにな、女の人誰でも被る白いかぶりに、白いエプロン着ていて、紺のモンペ穿いて居るんだもね。顔と足が白い被りと、エプロンで目が迷つたら見えないさね。その小母さんと別れてから桜橋越えて、又びつくりしたんだ。

一人の男が「うんうん」と言つて倒れて唸つて居るのだ。又厭なものに出くわしてしまつたなと思ひながら、恐ろしいと思はなかつたから、

『おいどうした。おい・おい』と大声でどなつたら、

『おばけだ・おばけだ』とその男は叫び出した。

『おばけなんぞいないぞ何言つてるんだ』
あつ。俺が今一寸前驚いたあの小母さんをこいつも見たんだな、そして、びつくりして

腰抜かしたな。よく見たら栃木の若者よ、手を引つぱつて起してやつてわしもびつくりさつきしたことや、
下武士の○○さんこの小母さんが、藤之台から桜橋通つて帰りの姿が。暗闇に、白いエプロンに、白の被りに紺のモンペだもの、腰から下が見えない姿には、本当にわしも髪が逆立つたと言つてやつたら、その若者も抜けた腰が元に戻つて立つて帰つて行つた。

旧桜橋は、昭和六〇年八月まで使用していた、現在の大昭寺の直ぐ下側と言つたら判り易いだろう。若佐から夜てくてく歩いて来たら、朝日の防風林、大昭寺付近から大川桜橋付近も森、現在の緑園団地付近も林と笹藪、そして「墓地。すつかり風景は変わつてしまつた。

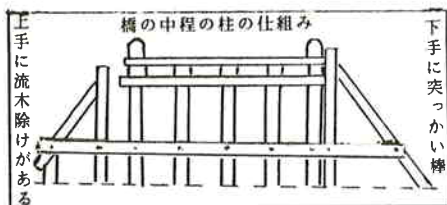
語り手 曾我 新一
文責 徳永 良行



中央橋

現在この場所にある橋は「永代橋」と言っている

川下から撮影した写真が役場にあつたのを見て描いた。初代村長高橋栄昭他9名その写真に写っているから、大正3年頃だろうか？



下佐呂間防空監視哨

中佐呂間市街にも現若佐にもあった

写真があつて、私がその勤務もした経験があるので、戦前の大事な記録として、簡単に書いて見ます。

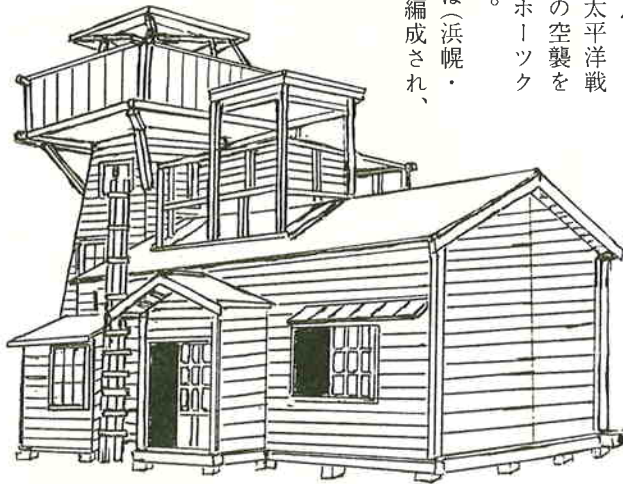
浜佐呂間防空監視哨は、一九四二年（昭一八年）新築された。場所は、浜佐呂間市街斉藤精米所（現、斉藤ストアー）裏七〇メートル番号線東七〇メートル地点

一九四一年一月八日、太平洋戦争突入、米國航空母艦からの空襲を想定して、太平洋及び、オホーツク沿岸地域各地に設置された。

組織、浜佐呂間方面地域は（浜幌・仁倉・知来）から、五個班編成され、一個班の人数は、班長以下六名として、二名で一時間づつ立哨と云うことで勤務させられた。

二四時間勤務で、上下番交替して、絶えず敵機を警戒していた。

一九四四年（昭一九）から徴兵年令引き下げに伴い、男子青年に代つて女子青年を勤務さ



せることになり、五個班の内二個班を女性の編成で作られた。それで終戦まで続けられたのだ。哨長は次の人がなっていた。

初代哨長、中沢敦司、二代哨長、渡部国次

佐呂間市街には、二九号と七線の交差付近にあつたとか、若佐は、十字街の北商店のところにあつたと伝えられている。

文責 室井 四郎

上、防空監視哨
下、下佐呂間防空監視哨
のあつた場所略図

